

# 黄いろのトマト

宮沢賢治

青空文庫



博物館十六等官

キユステ誌

私の町の博物館の、大きなガラスの戸棚とだなには、剥製はくせいですが、四足の蜂雀ひき はちすずめがいます。生きてたときはミイミイとなき蝶ちょうのように花の蜜みつをたべるあの小さなかあいらしい蜂雀です。わたくしはその四足の中でいちばん上の枝えだにとまって、羽を両方ひろげかけ、まっ青なそらにいまにもとび立ちそうなのを、ことにすきでした。それは眼めが赤くてつるつるした緑青ろくしょういろいろの胸をもち、そのりんと張った胸には波形のうつくしい紋もんもありました。小さいときのことですが、ある朝早く、私は学校に行く前にこっそり一寸ちよつとガラスの前に立ちましたら、その蜂雀が、銀の針の様なほそいきれいな声で、にわかに私に言いました。

「お早う。ペムペルという子はほんとうにいい子だったのかあいそうなことをした。」  
その時窓にはまだ厚い茶いろのカーテンが引いてありましたので室へやの中はちようどビール瓶びんのかけらをのぞいたようでした。ですから私も挨拶あいさつしました。

「お早う。蜂雀。ペムペルという人がどうしたっての。」

蜂雀がガラスの向うで又また云いいました。

「ええお早うよ。妹のネリという子もほんとうにかあいらしい子だったのかあいそうだなあ。」

「どうしたていうの話しておくれ。」

すると蜂雀はちよつと口あいてわらうようにしてまた云いいました。

「話してあげるからおまえは鞆かばんを床ゆかにおろしてその上にお座すわり。」

私は本の入ったかばんの上に座るのは一寸困りましたけれどもどうしてもそのお話を聞きたかったのでとうとうその通りしました。

すると蜂雀は話しました。

「ペムペルとネリは毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊んでいたよ（以下原稿一枚？なし）」

その時ほく僕も

『さようなら。さようなら。』と云つてペムペルのうちのきれいな木や花の間からまっす

ぐにおうちにかえった。

それから勿論もちろん小麦も搗ついた。

二人で小麦を粉にするときは僕はいつでも見に行つた。小麦を粉にする日ならペムペルはちぢれた髪かみからみじかい浅黄あせぎのチョッキから木綿もめんのだぶだぶずぼんまで粉ですつかり白くなりながら赤いガラスの水車場でことごとやっているだろう。ネリはその粉を四百グレングらいずつ木綿ふくろの袋こにつめ込んだりつかれてぼんやり戸口によりかかりはたけをながめていたりする。

そのときぼくはネリちゃん。あなたはむぐらはすきですかとからかつたりして飛んだのだ。それからもちろんキャベジも植えた。

二人がキャベジを穫とるときは僕はいつでも見に行つた。

ペムペルがキャベジの太い根を截きつてそれをはたけにころがすと、ネリは両手でそれをもつて水いろに塗ぬられた一輪車に入れるのだ。そして二人は車を押おして黄色のガラスの納な屋やにキャベジを運んだのだ。青いキャベジがころがってるのはそれはずいぶん立派だよ。

そして二人はたつた二人だけずいぶんたのしくくらししていた。」

「おとなはそこらに居なかつたの。」わたしはふと思ひ付いてそうたずねました。

「おとなはすこしもそこらあたりに居なかつた。なぜならペムペルとネリの兄きょうだい妹いまいの二人はたった二人だけずいぶん愉快ゆかいにくらしてたから。

けれどほんとうにかあいそうだ。

ペムペルという子は全くいい子だったのかあいそうなことをした。

ネリという子は全くかあいらしい女の子だったのかあいそうなことをした。」

蜂雀は俄にわかにだまつてしまいました。

私はもう全く気が気でありませんでした。

蜂雀はいよいよだまつてガラスの向うでしんとしています。

私もしばらくは耐こらえて膝ひざを両手で抱かかえてじつとしていましたけれどもあんまり蜂雀がいつまでもだまつているもんですからそれにそのだまりようと云つたらたとえ一ぺん死んだ人が二度とお墓から出て来ようたつて口なんか聞くもんかと云うように見えましたのでとうとう私は居たたまらなくなりました。私は立つてガラスの前に歩いて行って両手をガラスにかけて中の蜂雀に云いました。

「ね、蜂雀、そのペムペルとネリちゃんどがそれから一体どうなったの、どうしたつて云うの、ね、蜂雀、話してお呉くれ。」

けれども蜂雀はやつぱりじつとその細いくちばしを尖らしたまま向うの四十雀の方を見たつきり二度と私に答えようとしませんでした。

「ね、蜂雀、談してお呉れ。だめだい半分ぐらい云っておいていけないいたら蜂雀ね。談してお呉れ。そら、さっきの続きをさ。どうして話して呉れないの。」

ガラスは私の息ですっかり曇りました。

四羽の美しい蜂雀さえまるでぼんやり見えたのです。私はどうとう泣きだしました。

なぜって第一あの美しい蜂雀がたった今まできれいな銀の糸のような声で私と話をしていたのに俄かに硬く死んだようになってその眼もすっかり黒い硝子玉か何かになってしまいました。たつても四十雀ばかり見ているのです。おまけに一体それさえほんとうに見ているのかただ眼がそっちへ向いてるように見えるのか少しもわからないのでしよう。それにまたあんなかあいらしい日に焼けたペムペルとネリの兄妹が何か大へんかあいそうな目になったというのですものどうして泣かないでいられましょう。もう私はその為ならば一週間でも泣けたのです。

すると俄かに私の右の肩が重くなりました。そして何だか暖いのです。びっくりして振りかえって見ましたらあの番人のおじいさんが心配そうに白い眉を寄せて私の肩に手を置

いて立っているのです。その番人のおじいさんが云いました。

「どうしてそんなに泣いて居るの。おなかでも痛いのかい。朝早くから鳥のガラスの前に来てそんなにひどく泣くもんでない。」

けれども私はどうしてもまだ泣きやむことができませんでした。おじいさんは又云いました。

「そんなに高く泣いちゃいけない。」

まだ入口を開けるに一時半も間があるのにおまえだけそつと入れてやったのだ。

それにそんなに高く泣いて表の方へ聞えたらみんな私に故障を云って来るんでないか。

そんなに泣いていけないよ。どうしてそんなに泣いてんだ。」

私はやつと云いました。

「だって蜂雀がもう私に話さないんだもの。」

するとじいさんは高く笑いました。

「ああ、蜂雀が又おまえに何か話したね。そして俄かに黙り込んだね。そいつはいけない。

この蜂雀はよくその術をやって人をからかうんだ。よろしい。私が叱ってやろう。」

番人のおじいさんはガラスの前に進みました。



「おい。蜂雀。今日で何度目だと思う。手帳へつけるよ。つけるよ。あんまりいけなけあ仕方ないから館長様へ申し上げてアイスランドへ送っちまうよ。」

ええおい。さあ坊ちゃんぼっ。きつとこいつは談はなします。早く涙なみだをおふきなさい。まるで顔中ぐじやぐじやだ。そらええああすつかりさつぱりした。

お話がすんだら早く学校へ入らっしゃい。

あんまり長くなつて厭あきつちまうとこいつは又いろいろいやなことを云いますから。ではようがすか。」

番人のおじいさんは私の涙を拭ふいて呉れてそれから両手をせなかで組んでことりことり向うへ見まわつて行きました。

おじいさんのあし音がそのうすくらい茶色の室へやの中から隣となりの室へ消えたとき蜂雀はまた私の方を向きました。

私はどきつとしたのです。

蜂雀は細い細いハアモニカのような声でそつと私にはなしかけました。

「さつきはごめんなさい。僕すつかり疲つかれちまったもんですからね。」

私もやさしく言いました。

「蜂雀。僕ちつとも怒おこつちやいないんだよ。さっきの続きを話してお呉れ。」

蜂雀は語りはじめました。

「ペムペルとネリとはそれはほんとうにかあいなんだ。二人が青ガラスのうちのの中に居て窓をすつかりしめてると二人は海の底に居るように見えた。そして二人の声は僕には聞えやしないね。」

それは非常に厚いガラスなんだから。

けれども二人が一つの大きな帳面をのぞきこんで一所に同じように口をあいたり少し閉じたりしているのを見るとあれは一いっしょ緒しよに唱歌をうたっているのだということは誰たれだつてすぐわかるだろう。僕はそのいろいろにうごく二人の小さな口つきをじつと見ているのを大へんすきでいつでも庭のさるすべりの木に居たよ。ペムペルはほんとうにいい子なんだけれどかあいそうなことをした。

ネリも全くかあいらしい女の子だったのかあいそうなことをした。」

「だからどうしたつて云うの。」

「だからね、二人はほんとうにおもしろくくらしていたのだから、それだけならばよかつたんだ。ところが二人は、はたけにトマトを十本植えていた。そのうち五本がボンデロー

ザでね、五本がレッドチェリーだよ。ポンデローザにはまっ赤な大きな実がつくし、レッドチェリーにはさくらんぼほどの赤い実がまるでたくさんできる。ぼくはトマトは食べないけれど、ポンデローザを見ることならもうほんとうにすきなんだ。ある年やつぱり苗なえが二いろあつたから、植えたあとでも二いろあつた。だんだんそれが大きくなって、葉からはトマトの青いにおいがし、茎くきからはこまかな黄金きんの粒つぶのようなものも噴ふき出した。

そしてまもなく実がついた。

ところが五本のチェリーの中で、一本だけは奇体きたいに黄いろなんだろう。そして大へん光るのだ。ギザギザの青黒い葉の間から、まばゆいくらい黄いろなトマトがのぞいているのは立派いだった。だからネリが云いった。

『いさま、あのトマトどうしてあんなに光るんでしょね。』

ペムペルは唇くちびるに指をあててしばらく考えてから答えていた。

『黄金きんだよ。黄金だからあんなに光るんだ。』

『まあ、あれ黄金なの。』ネリがすこしばびっくりしたように云った。

『立派だねえ。』

『ええ立派だわ。』

そして二人はもちろん、その黄いろなトマトをとりもしなけあ、一寸ちよつとさわりもしなかつた。

そしたらほんとうにかあいそうなことをしたねえ。」

「だからどうしたって云うの。」

「だからね、二人はこんなに楽しくくらししていたんだからそれだけならばよかつたんだよ。ところがあつた夕方二人が羊齒しだの葉に水をかけてたら、遠くの遠くの野はらの方から何とも云えない奇体ない音が風に吹き飛ばふされて聞えて来るんだ。まるでまるでいい音なんだ。切れ切れになつて飛んでは来るけれど、まるでずらんやハリオトロープのいいかおりさえするんだろう、その音がだよ。二人は如露じよろの手をやめて、しばらくだまつて顔を見合せたねえ、それからペムペルが云つた。

『ね、行つて見ようよ、あんなにいい音がするんだもの。』

ネリは勿論もちろん、もつと行きたくつてたまらないんだ。

『行きましよう、兄さま、すぐ行きましよう。』

『うん、すぐ行こう。大丈夫だいじょうぶあぶないことないね。』

そこで二人は手をつないで果樹園を出てどんどんそっちへ走つて行つた。

音はよつぽど遠かった。樺かばの木の生えた小山を二つ越こえてもまだそれほど近くに近くもならず、楊やなぎの生えた小流れを三つ越えてもなかなかそんなに近くはならなかった。

それでもいくらか近くはなつた。

二人が二本の樞かやの木のアーチになつた下を潜くぐつたら不思議な音はもう切れ切れじゃなくなつた。

そこで二人は元氣を出して上着の袖そでで汗あせをふきふきかけて行つた。

そのうち音はもつとはつきりして来たのだ。ひよろひよろした笛ふえの音も入っていたし、大喇叭おおらっぱのどなり声もきこえた。ぼくにはみんなわかつて来たのだよ。

『ネリ、もう少しだよ、しつかり僕ぼくにつかまつておいで。』

ネリはだまつてきれで包んだ小さな卵形の頭を振つて、唇かを噛かんで走つた。

二人がも一度、樺の木の生えた丘おかをまわつたとき、いきなり眼めの前に白いほこりのぼやぼや立つた大きな道が、横になつているのを見た。その右の方から、さっきの音がはつきり聞え、左の方からもう一ひとかたま団だんり、白いほこりがこっちの方へやって来る。ほこりの中から、チラチラ馬の足が光つた。

間もなくそれは近づいたのだ。ペムペルとネリとは、手をにぎり合つて、息をこらして

それを見た。

もちろん僕もそれを見た。

やって来たのは七人ばかりの馬乗りなのだ。

馬は汗をかいて黒く光り、鼻からふうふう息をつき、しずかにだくをやっていた。乗つてゐるものはみな赤シャツで、てかてか光る赤革の長靴をはき、帽子には鷲の毛やなにか、白いひらひらするものをつけていた。鬚をはやしたおとなも居れば、いちばんしまいにはペムペル位の頬のまっかな眼のまっ黒なかあいい子も居た。ほこりの為にお日さまはぼんやり赤くなつた。

おとなはみんなペムペルとネリなどは見ない風して行つたけれど、いちばんしまいのあのかあいい子は、ペムペルを見て一寸唇に指をあててキスを送つたんだ。

そしてみんなは通り過ぎたのだ。みんなの行つた方から、あの子の音がいよいよはつきり聞えて来た。まもなくみんなは向うの丘をまわつて見えなくなつたが、左の方から又誰かゆつくりやつて来るのだ。

それは小さな家ぐらいある白い四角の箱のようなもので、人が四五人ついて来た。だんだん近くになつて見ると、ついて居るのはみんな黒ん坊で、眼ばかりきらきら光らして、

ふんどしだけして裸足はだしだろう。白い四角なものを囲んで来たのだけれど、その白いのは箱じやなかった。実は白いきれを四方にさげた、日本の蚊帳かやのようなもので、その下からは大きな灰いろの四本の脚あしが、ゆつくりゆつくり上ったり下ったりしていたのだ。

ペムペルとネリとは、黒人はほんとうに恐こわかったけれど又面白おもしろかった。四角なものも恐こわかったけれど、めずらしかった。そこでみんなが過ぎてから、二人は顔を見合せた。そして

『ついて行こうか。』

『ええ、行きましょう。』と、まるでかすれた声で云ったのだ。そして二人はよほど遠くからついて行つた。

黒人たちは、時々何かわからないことを叫さけんだり、空を見ながら跳はねたりした。四本の脚はゆつくりゆつくり、上ったり下ったりしていたし、時々ふう、ふうという呼吸の音も聞えた。

二人はいよいよ堅かたく手を握にぎつてついて行つた。

そのうちお日さまは、変に赤くどんよりなって、西の方の山に入ってしまった、残りの空は黄いろに光り、草はだんだん青から黒く見えて来た。

さつきからの音がよいよ近くなり、すぐ向うの丘のかけでは、さつきのらしい馬のひんひん啼くのも鼻をぶるると鳴らすのも聞えたんだ。

四角な家の生物が、脚を百ぺん上げたり下げたりしたら、ペムペルとネリとはびつくりして眼を擦った。向うは大きな町なんだ。灯が一杯についている。それからすぐ眼の前は平らな草地になっていて、大きな天幕がかけられている。天幕は丸太で組んである。まだ少しあかるいのに、青いアセチレンや、油煙を長く引くカンテラがたくさんともって、その二階には奇麗な絵看板がたくさんかけてあったのだ。その看板のうしろから、さつきからのいい音が起つていたのだ。看板の中には、さつきキスを投げた子が、二疋の馬に片つ方ずつ手をつけて、逆立ちしてる処もある。さつきの馬はみなその前につながれて、その他にだつて十五六疋ならんでいた。みんなオートを食べていた。

おとなや女や子供らが、その草はらにたくさん集つて看板を見上げていた。

看板のうしろからは、さつきの音が盛んに起つた。

けれどもあんまり近くで聞くと、そんなにすてきな音じゃない。

ただの楽隊だつたんだい。

ただその音が、野原を通つて行く途中、だんだん音がかすれるほど、花のおいがつ



いて行つたんだ。

白い四角な家も、ゆつくりゆつくり中へはいつて行つてしまった。

中では何かが細い高い声でないた。

人はだんだん増えて来た。

楽隊はまるで馬鹿のように盛んにやった。

みんなは吸いこまれるように、三人五人ずつ中へはいつて行つたのだ。

ペムペルとネリとは息をこらして、じつとそれを見た。

『僕たちも入つてどうか。』ペムペルが胸をどきどきさせながら云つた。

『入りましょう』とネリも答えた。

けれども何だか二人とも、安心にならなかつたのだ。どうもみんなが入口で何か番人に渡すらしいのだ。

ペムペルは少し近くへ寄つて、じつとそれを見た。食い付くように見ていたよ。

そしたらそれはたしかに銀か黄金きんかのかけらなのだ。

黄金をだせば銀のかけらを返してよこす。

そしてその人は入つて行く。

だからペムペルも黄金をポケットにさがしたのだ。

『ネリ、お前はここに待つといで。僕一ちよつと寸うちまで行つて来るからね。』

『わたしも行くわ。』ネリは云つたけれども、ペムペルはもうかけ出したので、ネリは心配そうに半分泣くようにして、又看板を見ていたよ。

それから僕は心配だから、ネリの処に番しようか、ペムペルについて行こうか、ずいぶんしばらく考えたけれども、いくらそこらを飛んで見ても、みんな看板ばかり見えて、ネリをさらつて行きそうな悪漢は一人も居ないんだ。

そこで安心して、ペムペルについて飛んで行つた。

ペムペルはそれはひどく走つたよ。四日のお月さんが、西のそらにしずかにかかつていだけれど、そのぼんやりした青じろい光で、どんどんどんどんペムペルはかけた。僕は追いつくのがほんとうに辛つらかった。眼がぐるぐるして、風がぶうぶう鳴つたんだ。樺かばの木も楊やなぎの木も、みんなまつ黒、草もまつ黒、その中をどんどんどんどんペムペルはかけた。

それからとうとうあの果樹園にはいったのだ。

ガラスのお家が月のあかりで大へんなつかしく光っていた。ペムペルは一寸立ちどまつてそれを見たけれども、又走つてもうまつ黒に見えているトマトの木から、あの黄いろの

実のなるトマトの木から、黄いろのトマトの実を四つとった。それからまるで風のように、あらしのように汗と動悸どうきで燃えながら、さっきの草場にとつて返した。僕も全く疲つかれていた。

ネリはちらちらこつちの方を見てばかりいた。

けれどもペムペルは、

『さあ、いいよ。入ろう。』

とネリに云つた。

ネリは悦よろこんで飛びあがり、二人は手をつないで木戸口に來たんだ。ペムペルはだまつて二つのトマトを出したんだ。

番人は『ええ、いらつしやい。』と言いながら、トマトを受けとり、それから變な顔をした。

しばらくそれを見つめていた。

それから俄にわかに顔が歪ゆがんでどなり出した。

『何だ。この餓鬼がきめ。人をばかにしやがるな。トマト二つで、この大入の中へ汝おまえたちを押し込んでやつてたまるか。失せやがれ、畜生ちくしょう。』

そしてトマトを投げつけた。あの黄のトマトをなげつけたんだ。その一つはひどくネリの耳にあたり、ネリはわつと泣き出し、みんなはどつと笑ったんだ。ペムペルはすばやくネリをさらうように抱いて、そこを遁げ出した。

みんなの笑い声が波のように聞えた。

まっくらな丘の間まで遁げて来たとき、ペムペルも俄かに高く泣き出した。ああいうかなしいことを、お前はきつと知らないよ。

それから二人はだまってだまるときどきしくりあげながら、ひるの象について来たみちを戻った。

それからペムペルは、にぎりこぶしを握りながら、ネリは時々唾をのみながら、樺の木の生えたまっ黒な小山を越えて、二人はおうちに帰ったんだ。ああかいそうだよ。ほんとうにかあいそうだ。わかつたかい。じゃさよなら、私はもうはなせない。じいさんを呼んで来ちゃいけないよ。さよなら。」

斯う云つてしまうと蜂雀の細い嘴は、また尖つてじつと閉じてしまい、その眼は向うの四十雀をだまって見ていたのです。

私も大へんかなしくなつて

「じや蜂雀。さようなら。僕又来るよ。けれどお前が何か云いたかったら云ってお呉くれ。さよなら、ありがとうよ。蜂雀、ありがとうよ。」

と云いながら、鞆かぼんをそつと取りあげて、その茶いろガラスのかけらの中のような室へやを、しずかに廊下ろうかへ出たのです。そして俄かにあんまりの明るさと、あの兄妹のかあいそうなのとに、眼がチクチクツと痛み、涙なみだがぼろぼろこぼれたのです。

私のまだまるで小さかったときのことです。



# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 黄いろのトマト

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>